

スポーツ観戦環境の設計(Ⅱ)

-伝統的スタジアムと欧州先進スタジアム建設-

橋本純一

信州大学学術研究院総合人間科学系

Design on Spectator Sport Environment II

- Traditional Sport Venue and the Advanced Stadium Construction in Europe-

Junichi HASHIMOTO

School of Humanities and Social Sciences, Shinshu University

キーワード：スポーツ観戦環境、スタジアム建設、フライブルク

Keywords: big-time sports environment, Stadium Construction, Freiburg

1. はじめに

ポピュラー・スポーツ（ここでは主にサッカー）やその観戦環境(スタジアム/アリーナ)は、時代や社会の潮流や変容と同調しながら新設、改修が行われ、その際、スポーツ観戦空間は、経済的パワー、政治的パワー、文化的パワーの重層的なせめぎあい状況によってさまざまな様態を現わすことを、筆者は検証してきた。これまでの論稿(橋本, 2010, 2014, 2017)において、我が国のスポーツ観戦空間が複雑なパワー・ネットワーク(ハーグリブス, 1993)に組する少数の辣腕エージェントが、巧妙な戦略に基づいてヘゲモニーを遂行するということを明らかにしてきた。

本稿では、スポーツ観戦空間の機能と意味により深く迫るため、まず、近代スポーツ発祥期からこれまでのスポーツ競技場とファンとの関係性について検討する。それを踏まえて、現代の先進スタジアムがどのようなコンセプトの下でどのような政策決定過程を経て建設されている/されようとしているのかを、ドイツのサッカー・スタジアム建設事例を中心にしながら検討する。

2. スポーツ競技場と観客

サッカーやホッケー等の球技は中世の民衆スポーツにその起源があり、プレーする区域に制限がなく、しばしば町を縦横無尽に走り回って行われた。クリケットや野球についてもほぼ同

様で、緑色の草地さえあれば、どこでも行われていた(Raitz, 1995)。

しかし 19 世紀に入って近代スポーツ制度が整い条文化が進展するとプレー範囲は限定され、競技者と観客の境界が設けられる。19 世紀後半になって急激に観客が増加してくると、まずサポーターの立見区域が、その後には座席が設けられるようになる。そして 20 世紀以降、欧米や日本のメジャースポーツにおいては常に数万人の観客がピッチ/フィールドを囲むスタンドで声援を送るようになっていく。その様子はサッカーファンがボルトン・ワンダラスのホーム、バーデン・パーク・スタジアムに押し寄せている状態を描いた L.S. ローリーの“Going to the match—試合に行く—”(1953 年作) という油絵によく表現されている。



図1 Going to the match (試合に行く)
L.S. ローリー, 1953 年

一般的には、スポーツチームは特定の場所と大きな繋がりがあり、ほとんどの場合、特定の地域の代表である。その証拠に、数多くのスポーツチーム名はプレイしている場所に由来して名付けられている。地元の人気スポーツはその地域や国のプライドやアイデンティティを醸成/刺激することにおいて極めて強力であり、スポーツは戦争同様、ただ単にチームに（直接的か間接的/代理的にかかわらず）帰属しているということを通じて、人と場所を結び付けている希少なツールといえよう。チームは特定のスタジアムやアリーナを有し、サポーターにとってスタジアムに試合を観に行くという経験は、スタジアムそのものだけでなく、周辺の場所や空間（パブや居酒屋、テイクアウトの売店、賭け屋、フードスタンド、路地や目抜き通り等）を経験することでもあるということを理解することが重要である。このような試合の日のルーティンは数十年の経験を経て形成されてきたものである。そしてそれらはサポーター、路上販売員、警察、行政等を通してのものであり、独特のリズムと意味を作り出している（Kelsall, 2000）のである。

Bale が以下に述べるように、スポーツ競技場は、選手だけでなくファンともトポフィリア（場所愛）的關係を構築する。

サッカーから得られる心理的恩恵によってスタジアムはトポフィリアの源泉といえる。特にホームのスタジアムに定期的に観戦しに行く人にはそのような感情が明白にみられる。例えば、エディンバラのハイバーニアン FC のホームスタジアム、イースターロードのサポーターは「わかるだろ、その土地は俺の土曜日に組み込まれていて、それは俺が試合前にどこへ行き、誰と会い、何時に立ち去るかという行動の中心に位置しているんだ」新しいスタジアムに移転することは家族の誰かを失うに等しい[Mackay 1995]というファンもいて、これらは場所としてのサッカー・スタジアムに結び付けられた愛着、あるいはスタジアムを単にサッカーの試合が行われる機能的空間以上の強い感情を表現したものである（Bale, 2000: 92）。

スポーツを生観戦する際にはスタジアムそれ

自体を大きな魅力としてあげるサポーターも多い。それは試合中の雰囲気だったり、会場での試合以外のイベントからもたらされるものである。

Edensor & Millington (2010: 156) はマンチェスター・シティ FC の旧ホームスタジアムであるメインロードの雰囲気に関するシティファンの声を以下のようにまとめている。

場所の雰囲気は Thrift (2008: 231) が述べているように試合前の期待感、勝利をした時の安心感、試合後の失望感によって形成されている。それらの感情は観衆の声援、動き、振る舞いを通して模倣・伝播する。

この雰囲気はファンが感覚的に体現化するものであるが、ただ単に受け身的に熱中することから生ずるのではなく、空間との相互作用やファンカルチャーを実践様式から生み出されるものである。

メインロードの雰囲気はスタジアムに意気揚々と歩いていく人々の間で伝達されているものであり、ぺちやくちゃしゃべるファン、ライバルチームのサポーターの争いを解決しようと大急ぎで馬を降りる警察、チャントを歌いながら通りを歩く様子、食べ物の匂いや、タバコの煙、スタジアムの前に突如現れる広い空間、それらすべてが作用している。

Inglis (2001: 18) も「スポーツを愛するのと同じくらいスタジアムを愛している」とし、「スタジアムはスペシャルであり、その事実はスポーツと同じようにシンプルである」と綴っている。また、Canter ら (1989: 82) は「スポーツクラブにとって最も重要な物的シンボルはスタジアムそれ自体である。クラブの社会的歴史はスタジアムに刻み込まれ、常にスタジアムあつてのクラブである。ホームの芝は究極のシンボルであり、建物の形状は成功と失敗の歴史だけでなく希望と野心を反映するものである」とし、スタジアムの歴史的的重要性に基づく価値に言及している。これは橋本 (2010: 33) が言及したように、歴史とヴァナキュラーな価値を重視したトラディション (tradition+stadium) というコンセプトにも通じるものである。

Inglis (2001: 87) はシカゴ・カブスのホー

ム、リグレー・フィールドの議論において「これまで数多くの言葉がセンチメンタルに並べられてきた。リグレー・フィールドは、自由の女神、キャピタル・ヒル、金門橋と同様、それなしではアメリカを想像できないものである」。さらに「リグレー・フィールドは、恐慌、禁酒時代、冷戦、サマー・オブ・ラブ、そして現在のナイトゲームに至るまで、野球における英雄物語や神話と共に存続してきている」と続けている。このようにファンにとってスタジアムの重要性和意味を提供するのは、辿ってきたその歴史である。

スポーツは、完璧を追求し、規律を重視し、精神と魂の統一に深く関り、関わる人と場所と手続についての儀式やシンボルを確立しているという意味で、現代の宗教といえる。宗教的存在としてのスポーツに関連してノバック(1979)は宗教としてのスポーツに関して「スタジアムへ出かけることは、半分は政治大会、半分は教会に行くようなものである。」と述べ、その儀式性、祭礼性、シンボリック的要素における共通点からそれを説明している。その意味で1950年頃までイングランドのサッカー・スタジアムは「神に祈りを捧げる労働党大会会場」(Fishwick, 1989)であり、また同様にNFLのスタジアムは中産階級以上の人々の聖地といえよう。そしてBale(1993)は「もしスポーツが宗教であるなら、そのスタジアムは寺院であり、墓地である」等と、宗教的聖地としてのスポーツ競技場の存在を強調している。

さらにはトポフィリア的には「我が家」としてメタファーが重要である。トゥアン(1992)は、中世の大聖堂が人々を魅了するほとんど知られていない理由として、感覚器官を3つも4つも同時に刺激するような環境を人々に提供していることを挙げる。そして現代の摩天楼と比較しながら、共通点を高さ(垂直性)に見いだすことができるが、感覚的・審美的に全く異なった意味を持つものであるとしている。現代の摩天楼は概ね視覚的要求をみたすようには設計されている。一方、大聖堂ではそれに限らず、内部において特別な光景・音・手触り・匂いを体験でき、それぞれの感覚が互いを強め合い一体となることにその本質的特徴を見だせるという。ホーム(我が家)としての記憶はこのよう

な感覚的体験と深いつながりがある。特に匂いやサウンドがいかにか過去の情景や出来事についての感情を伴った鮮明な記憶を蘇らせる力をもつのかを彼は強調している。

次節ではここまでに検討した「歴史」、「宗教」、「我が家(ホーム)」のメタファーに加え、橋本(2010)が観戦空間のパースペクティブとして指摘した「自然」、「富(収益)」、「イデオロギー」、「場所」、「美」といった諸要素に照らし合わせつつ、欧州先進スタジアム建設政策の実態を明らかにする。

3. 欧州先進サッカー・スタジアム建設～ドイツ・SCフライブルクを中心に～

今回、ドイツ・フライブルク市のSCフライブルク(ドイツ・ブンデスリーガ1部所属)に新スタジアム計画が進行中ということで、その経緯を明らかにしつつ、実際にスタジアム政策決定過程でどのような手続きが導入され、どのようなステークホルダーのいかなる要望や意見が提案され反映されたのを、新聞記事や関係書類のドキュメント分析、フィールドワーク、関係者への半構造化インタビューを混じえて行ない、その実態を明らかにした。

(1) フライブルク市の概要と文化社会的背景

ドイツ最南端の都市・フライブルクはドイツ連邦共和国南西部、バーデン＝ヴュルテンベルク州の郡独立市で、正式にはフライブルク・イム・ブライスガウ(Freiburg im Breisgau)市である。人口は約23万人で、そのうちの3万人が大学関係者であり、大学都市として認知されている。また環境保護で先進的な取り組みをしている都市として世界的に知られている。

1871年のドイツ帝国成立以降、第二次世界大戦後、一時フランス占領下に置かれたことがあり、現在でも様々な点でフランスの影響を受けているが、一貫してドイツ最南の主要都市として存在している。学都であるがゆえにフライブルクでは1960年代後期に激しい学生運動が表出し、1970年代にフライブルク近郊のヴィール原発の建設計画への反対運動が行われた際には、学生運動の中で成熟した市民の政治意識を表象するかのようになり、多くの市民がこの運動に参加した。このような出来事の結果として、フライ

ブルクでは自治主義の空気が、環境・自然保護運動へと進展し、新しく設立された緑の党への強い支持傾向が根付いている。そして学術的にも産業的にも環境を志向する空気に包まれる中、フライブルクはドイツの環境首都と称されている。2010年の上海万博においては「グリーンシティ」として出展している。

またフライブルクは交通の便利な場所に位置し、大学や研究機関が数多く立地することから、国際会議や見本市、大規模な集会等の開催地として人気がある都市の一つでもある。

(2) SC フライブルクの概要と現スタジアム

SC フライブルクは1904年創立のブンデスリーガ1部に所属するクラブチームである。クラブ（正式には協同組合：eingetragener Verein）会員は約15000人で、長期にわたる黒字（健全）経営が特徴である。また女子サッカー部門やテニス部門も伝統的に強い。サッカー・トップチームは長きに亘り3部と2部を行き来していたが、ここ25年で19シーズンをブンデスリーガ1部で戦っている。特に1991/1992シーズン1部リーグに初昇格以後16年間、フォルカー・フィンケ監督の長期政権の下に、ユニークなチーム戦術、多くの名選手を生み出した選手育成、優れたスカウティング、エコ・スタジアム（ソーラーエネルギー等）等、ドイツ・サッカー界でも模範的なクラブとして評価が高い。特に「フライブルガー・フースバルシューレ」を含む育成部門が有名で、これをモデルにして育成部門を設立/改設したクラブは数多い。

サポーターはフライブルクが大学都市であることから、学生や大卒の「インテリ層」が多いことで有名である。熱狂的ではあるものの、相手チームの罵倒などは他クラブに比べて少なく、フェアプレー精神と常にクラブやチームの状況を現実的に見つめる眼を持つサポーターとして評価されている。

またフライブルクサポーターの特徴として、緑の党の支持者や左翼のサポーターの割合が高く、特にフィンケ監督時代にはクラブと協力して移民の受け入れ支援、アフリカ救援、外国人排除反対の活動等、政治的/社会的な活動を頻繁に行っていることが知られている。

ホーム競技場は、1954年よりサッカー専用ス

タジアムである「シュバルツヴァルト・スタジアム（Schwarzwald-Stadion）」（24000人収容）を本拠地として使用している（Footballtripper, 2016）。このスタジアムについては今回、筆者がクラブの広報担当者に面会し、2018年2月21日に現地にて直接説明を受けた。建設当時から15年程は規模的にも機能的にも必要最低限の施設設備のスタジアムであったが、1970年代より徐々に拡大工事が行われるようになり、特に1991年からはフィンケ監督の「クラブの投資はまず足（選手）より石（施設）に」という方針の下、スタジアムの近代化と拡大化が積極的に推進されるようになった。1999年には現スタジアムの仕様になった。

緑の党の支持者でもあるフィンケ、そして「環境都市」として名声を誇るフライブルクらしく、スタジアムの屋根には住民参加型の太陽光パネルが敷かれている。この太陽光パネルによって得られた電気はもちろんスタジアムで利用し、余剰分は電力会社等に売却し運営資金に充てる他、所有者（一般市民もいる）のもとにも入ってくる。さらに太陽光パネルの所有者には、スタジアム年間パスを優先的に買うことができる特典がついている。芝暖房でもエコ・エネルギーが利用されているなど、環境に優しいスタジアムとして知られている。1シーズン40万人超の入場者があり、スタジアム稼働率は99%を誇る。



図2 ソーラーパネル付き屋根のあるシュバルツヴァルト・スタジアム

(3) 新スタジアム建築の経緯

本節以降はフライブルク市開発部・部長のヨハン・ツシュター（Jochen Tuschuter）氏とSCフライブルクの新スタジアム政策担当者のマルセル・ボイ（Marcel Boyé）氏に対して半構造化

インタビュー（2018年2月19日－21日）を実施し聞き取りを行った内容も適宜盛り込みつつ記載する。

現在、SCフライブルクの新ホームスタジアム計画が進行中である。2018年3月現在、以下のような流れで推移している。

- ・2006年 最初の構想と議論
 - ・2009年 「ドライザム・スタジアム（現シュバルツヴァルト・スタジアム）」の存続性の可能性を検証
 - ・2010年 新築に対して、全市長候補者と大多数のフライブルク市民が反対
 - ・2010年 フライブルク市外の候補地の可能性はないのかという声が出る
 - ・2011年 「ドライザム・スタジアム」の改築費が5300百万ユーロ、及びその建築期間が12年を要すると鑑定される
 - ・2011年 24の候補地の検証
 - ・2013年 候補地としてヴォルフスヴィンケルを選出
 - ・2014年 候補地ヴォルフスヴィンケルの専門的鑑定の結果：問題なし
 - ・2015年 住民投票で新スタジアム計画に過半数（58%）の賛成
 - ・2016年 SFG社の設立
 - ・2017年7月28日 設計（デザイン）コンペの入選決定
 - ・2017年8月31日 設計（デザイン）コンペの結果公表
- （2020年 竣工・開場予定）

2006年前後にはクラブが1部リーグにすっかり定着するようになっていたこともあり、新スタジアム建設の機運が醸成された。しかし2010年前後時点では市長はじめ大方の市民が新スタジアム建設にはネガティブな反応であった。それでも2009年にはSCフライブルクが新しいスタジアム建設の要望をフライブルク市に表明する。クラブのBoyé氏はその理由として、①現在のスタジアムではマネジメントにおいて様々な（特に経済的）面で将来性がない②ブンデスリーガ・ライセンス（財務状況に加え、インフラ整備、人事、メディア対応などの諸条件）の確保③競技的パフォーマンスのギャランティー④社会的責任の遂行⑤プロチームと若手チームと

のよりよい関係性創出、を上げている。また、近隣住民が騒音、ゴミ、群衆の足踏みの音、道路上での行儀の悪さに多かれ少なかれ悩まされていたことも影響を与えていた（Hupka, 2014）。そこでクラブ（1名）とフライブルク市（開発部と交通計画部から各1名）でプロジェクトチームが形成され、民間の専門会社に新スタジアム向け候補地調査を委託する。最初は35か所の候補地が上がったが順次24→14と絞り込まれ、最終的に飛行場脇のヴォルフスヴィンケル地域が残った。ドイツにおけるコンパクト・シティ基準や厳しい環境規制等に照らし合わせると、自ずとこの地域だけが残ったという。市議会からは現存のSCスタジアムの改修の可能性の調査も要求された。その調査の結果、5200万ユーロから6500万ユーロの経費と数年の改修期間が必要であることが分かったため、現スタジアムの改築計画は没となった。特に改修期間中にホームゲームが開催不可能になることはクラブにとってもファンにとっても容認できないことであり、当然の決定であろう。

2013年には市議会は新スタジアムの立地として空港のあるヴォルフスヴィンケル地域を調査することを要求する。専門機関への委託調査で、この地区が新スタジアムの立地として最も適切であるという結果が示され、市議会の主張が通ったが、ほぼ同時に周辺の地域の住民の反対運動が始まることとなる。市は気流、飛行場との関係性、騒音、安全等の条件を事前に鑑定すると約束した。2014年1月に公表された鑑定結果で当該地区への建設は特に大きな問題にはならないとされ、遂に2015年2月2日、立地（ヴォルフス・ヴィンケル地区）、スタジアム・サイズ（34600人収容）、予算（約7600万ユーロ）、安全性、騒音等、大まかなスタジアム概要が公表された上で、住民投票が実施される運びとなった。

市民による住民投票（投票率46.5%）は賛成票が58.2%で、反対41.8%を上回り、スタジアム建設計画は認められる。開票ではヴォルフスヴィンケル地区に隣接するモースヴァルト地区を除く全ての市区で賛成多数であった。計画を推進してきたサロモン市長（緑の党）は、「住民のSCフライブルクへの愛着心の現れである。不安と不安を抱かせる集団（筆者注：空港を利

用するパイロット達の建設反対派グループを指している)を乗り越える確信と未来の勝利でもあった」と述べている (Röderer, 2015)。住民投票後、このスタジアム原案を、Bプランと称する「フライブルク土地利用に関する詳細計画」と照らし合わせる作業を進行させつつ、2016年1月にはこのスタジアム計画を推進するフライブルク・スタジアム・オブジェクト合資会社(略称:SFG)が設立される。SFGのメンバー構成は市側から2名、SCフライブルク側から Boyé氏1名(議案採決にあたっては市と対等の2票の権利を持つ)計3名となっている。SGFには監査委員会も設置されているが、その構成は、市側が市長・副市長・14人の市議で16人(16票)、クラブ側は4人であるが、クラブは一人当たり4票分を保持し、計16票の対等な議決権を持っている。SFGの最初の大きな課題は設計と施工の担当会社選定であり、2017年に公募(デザイン・コンペ)を行なった。コンペには開始しドイツ国内から6社、国外から2社の計8社(共同企業体含む)が応募し、最終的にはHPP社(設計)とKöster社(施工)と、ドイツ国内の共同企業体に決定した(図3-1、図3-2参照)。



図3-1 2017年デザイン・コンペで選定されたHPP社の作品(外観)



図3-2 2017年デザイン・コンペで選定されたHPP社の作品(内観)

2018年3月現在、SFGの管理の下、ファンや近隣住民はじめ、諸ステークホルダーとの調整をしながら、開場に向けての作業が進行中であ

る。

(4) 新スタジアムの仕様、コンセプト、政策決定過程にみる特徴

新スタジアムは世界基準においては中規模サイズで予算的にもそれほど大きなものではない。SCフライブルクは1500万~2000万ユーロ(ブンデス1部か2部かの所属によって変動)を拠出、SGFがクレジットで3270万ユーロ、ビール会社のRothausが1278万ユーロ、バーデン=ヴュルテンベルク州が補助金950万ユーロをそれぞれ負担して、土地(市から無償貸与)以外の周辺インフラを含んだ総工費は上限7600万ユーロと、このクラスのスタジアムとしては低予算である。先だって視察した(ほぼ同クラスの)フランス・ボルドーの新スタジアム(Stade Matmut Atlantique: 図4-1、図4-2参照)の総工費1億8300万ユーロと比較するとその差は歴然である。

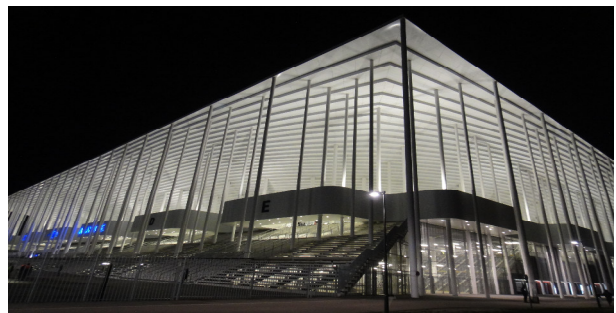


図4-1 ボルドーの新スタジアム: Stade Matmut Atlantique (外観)

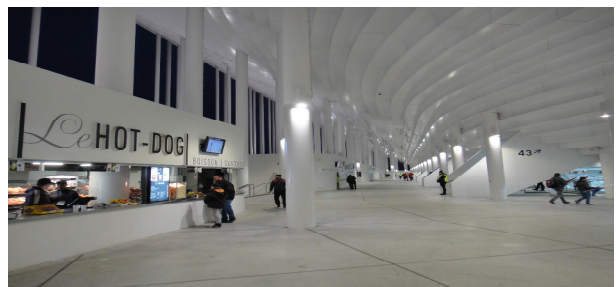


図4-2 ボルドーの新スタジアム: Stade Matmut Atlantique (内観)

経済的な面での持続可能性という意味ではビジネス・ボックスを20室、個人用VIPラウンジ席を1800人分用意して現スタジアムの最大の欠陥に対応しようとしている。これらは試合のない日々には、大小宴会、会議、カンファレンス、ワークショップ、SCフライブルク・ミュージア

ム、グッズ販売店、カフェ、レストラン等を日常的に稼働させて収益をあげる仕様となっている。

しかしながら最大の特徴は自然環境と住環境を強く意識した持続可能性に関連する事項であろう。スタジアムのヒーティング・システムはCO₂フリー、しかもそれは近隣工場からの余剰熱を利用するという。

ヴォルフスヴィンケル地区という場所の選定にあたっては、スタジアム建設反対派のみならずSCフライブルクのサポーターからも異論が出ていた。反対派の代表格は隣接するモースヴァルト地区住民である。バーデン新聞（Hupka, 2014）には「（モースヴァルト地区では）33000人のサッカーファンが自転車で頻繁に通るようになり、綺麗な緑地が痩せた芝に変わるのだろうか。季節になるとひばりが抱卵するのどかな地域では、ピアノ教師やラテン語の教授が静かな生活を楽しんでいるのだ—中略—モースヴァルトの森があり自然のままの草地がある。飛行場が見渡せ、雪化粧をしたシュヴァルツヴァルトの頂であるカンデル山とシャウインスランドの山がその背後には見える。夜にはキツネとウサギがみられることもあり、多くの人達がこのような光景がなんとか存在して欲しいと願っている」という建設反対（慎重）派の声や「ファン仲間と居酒屋で楽しくビールを飲み、その足で一緒に試合を見る。あの楽しさはどこへ行くのか。現スタジアムは、街中にあるのでそれが出来る。新しい候補地は郊外のため、全く違った環境であり、居酒屋は見当たらない。こうした慣れ親しんだ生活がなくなることを、寂しく感じる」というSCフライブルク・ファンの声も記事として紹介され、公になっている。住民投票までに賛否両論が様々な媒体で公開され、かなりの議論とネゴシエーションがあったという。

慣れ親しんだ「我が家」感を重視する姿勢はSFGに提出されている新スタジアムへのファン代表グループ（フライブルク・スタジアム・イニシアティブ）の要望にもうかがえる。「SCフライブルクのファンは独特な魅力ある雰囲気と家族的な雰囲気を持つ観客になじんできた。ドイツにはどこも似たようなアリーナ（スタジアム）が多数あるが、同類のものであって欲しくない」（Das neue SC-Stadion, 2015a）と、現

スタジアムで味わっている体験（快樂）の存続を表明している。第2節で「我が家」としての記憶や喜びは5感による感覚的体験と大きな繋がりとあると記したが、ファンはこの点についても「新しいスタジアムの座席の色は、クラブのシンボルカラー（赤）が良い。それも落ち着いたトーンが良い。ネオンカラーにしない方が良い。私達のクラブのスタジアムには合わない。デュッセルドルフのようなカラフルな座席（図5参照）にはしない方が良い」（Das neue SC-Stadion, 2015b）。また音響についても「新



図5 フォルチュナ・デュッセルドルフのエスプリ・アレナのカラフルな座席

しいスタジアムを成功に導く重要なファクターだ。賑やかで大きく元気な音が良い雰囲気を作り、スタンドからスタンドへそしてグラウンドへと伝わり盛り上がる。しかしながら近隣の住人への配慮のため、その音が外部に漏れないスタジアムでなければならない。そのためスタジアムの屋根の勾配や形状等に考慮することが必要だ。また私達ファンにとって、ケータリングは、出来るだけバラエティに富み、それもこの地域の食べ物や飲み物であってほしい」（ibid.）と、視覚、聴覚、味覚（嗅覚）の欲望に基づく要求をしている。

同様に、クラブの「歴史/遺産」についても、「（新スタジアムは）シュヴァルツバルトスタジアムの形式を踏襲している。その精神性も含めて、古さと新しさをスタイリッシュに組み合わせながら」（Das neue SC-Stadion, 2015a）設計されていることから、重要な要素として扱われているのは間違いない。また「私達のクラブは資料館がない。新しいスタジアムにそうした資料館や資料室（ミュージアム）があれば、ク

クラブの長い歴史の様々な文化が紹介できる。プロフェッショナルな資料の展示/広報はクラブのアイデンティティを形成することはもとより、福祉性や経済性あるクラブの文化を認識する良い機会となるだろう」(Das neue SC-Stadion, 2015c) という要望から、ファンにとってクラブの歴史/遺産がいかに大切か、その価値がうかがえる。サッカーの歴史の長い欧州では、レガシーの継承のため、今回視察したビルバオ(スペイン)のようにスタジアム内にミュージアムを併設することが多くなっている(図6参照)。

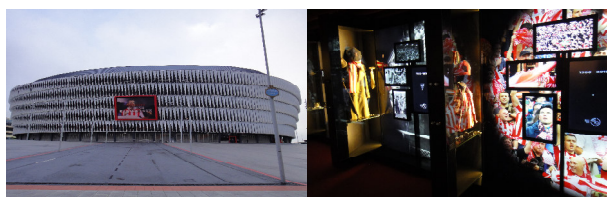


図6 アスレティック・ビルバオのサン・マメス・スタジアム(左)とスタジアム付設ミュージアムの展示(右)

新スタジアムのコンセプトからうかがえるイデオロギー/価値観の特徴は、SCフライブルクとファンの独特の一体感や雰囲気である。「私たちはこのスタジアムがフライブルクのサッカー文化を象徴するものであると信じて疑わない。フライブルクではサッカーは特別である。勝利が過大評価されることはなく、また敗北がこの世の終わりでもない。サッカーが日頃の欲求不満を放出する道具ということもない——喜びの感情をもたらすものなのだ。この地域のすべての人に喜びをもたらすのである。ちょうどこの地域の素晴らしい景色やおいしい食べ物やいいワインがそうであるように」(Das neue SC-Stadion, 2015a)と謳われているように、他のプロクラブにありがちな「勝利至上主義」とは一線を画す秀逸な表現に凝縮されている。

「美」的要素については、審美的基準の難しさを伴うが、もともとドイツは隣国フランス程には重視していないと思われる。確かに「新しいスタジアムは高さの違う4つのスタンドからなり、審美的に高質である一方、エレガントでありながら整然として」(ibid.)をはじめ、ところどころでスタジアムの美しさについてのコメントがみられはするが、スタジアム理念のキ

ー・コンセプトには「機能的、サステイナブル、創造的、経済的」というタイトルが最初に掲げられていて、「スタジアムは、一方でドイツ・サッカー最高レベルにおいて完璧にその主目的を果たし、もう一方で他の諸機能を果たすのに十分な施設を備えている。設計は数多くの活動を保証するものである」(ibid.)と、むしろ多機能性や持続可能性により拘り、重視している様子がうかがえる。この点は、ボルドー(図4: Stade Matmut Atlantique)をはじめとしたフランスの新スタジアムの「…かつエレガントな建物を目指した。…純粹さ、幾何学的な明快さが、モニュメンタルで優美な雰囲気を演出する」(淵上, 2015)という設計のコンセプトと、出現した表象から感じられる「エレガンス」「美」への拘りとは対照的である。

4. まとめにかえて

3節では、2節で検討したキー・エレメントに基づいて新スタジアムの理念や仕様等を明らかにしたが、ここでは特に重視すべきいくつかの特徴に触れておきたい。

2節・3節においては「雰囲気」の重要性を取り上げた。フライブルクのファンは新スタジアムへの要望で「大事なことは、それぞれの空間が区切られすぎないようにし、マインツやアウクスブルクのようにスタンドがまとまりのある雰囲気を持たせることが大事である」(Das neue SC-Stadion, 2015c)と、「統一感/一体感」のある雰囲気を醸成することへの拘りを表明している。これはある意味ドイツ人の心性を表しているようともいえよう。他国、今回は隣国フランスに見られた「美」「エレガンス」等への拘りとの違いが印象的であった。

近年の先進スタジアムに見られる多機能複合性については、それほど重視していない。それはあまりさまざま機能を持たせることは、サッカーの「聖地」的機能の弱体化に繋がるのではないかという危惧を考慮してのことと考えられる。この点については、日常的収益性とのバランスの取り方の普遍的課題といえる。

最も重要視しなければならない点は、あらゆる政策決定過程において市民が参画し、課題解決の手続は常に民主的かつ透明性を持って進めなければならないと、担当者が強く意識してい

ることである。それは市開発部・部長のツシュター氏とSCフライブルクのボーイ氏の話の要所要所でうかがえた。2013年からはファングループ代表の立地やスタジアム仕様についての要望を細部に渡って吸い上げて、そのほとんどを基本デザインに組み込んでいる。しかし一方で、スタジアム建設推進派住民/ファンとだけでなく、反対の根強いモースヴァルト地区住民やパイロット・グループにも頻繁な情報開示と対話集会を心掛けているのである。それでも最終的には多数決（投票）という手段で（ある意味冷徹に）決定するシステムが（少なくともドイツでは）浸透/機能しているようである。それは市民参加が協同組合（e.V.=eingetragener Verein）という形式で幅広く普及していることにも起因している（村上，2007）と思われる。事実、SCフライブルクもこのe.V.であり、全ての決定が民主的な方法で選任されたり、議決されたりするのである。そしてこの最終決定あるいは議決には、従順なまでに甘受する様子も本事例で検証された。

最後に、3節で示したようにSCフライブルクと自治体（市）は「社会的責任」を果たすために新スタジアム建設が必要と主張/推進している。文化としてのサッカー（スポーツ）は、市民の豊かな生活に寄与することによってその存在が正当化される。欧州（ドイツ）におけるスタジアムと、それ以外の国や地域におけるスタジアムの存在価値の違いを視野に入れつつも、今後のスタジアム建設は常にこのような観点から検討してゆくことが求められよう。

【付記】本研究は日本学術振興会平成29年度科学研究費助成事業の交付金助成（課題番号：16K01699）を受けて実施した。

【謝辞】本研究の調査において、フライブルク市在住の前田成子氏には通訳、翻訳、面談のセッティング等、さまざまな面でご協力いただきました。厚く御礼申し上げます。

【参考文献】

Bale, J. (1993) *Sport, Space and the City*, Routledge. (ベイル・J、池田勝訳、1997、『サッカー・スタジアムと都市』体育施設出版)

- (2000) ‘The Changing Face of Football: Stadium and Communities’ in J.Garland, D.Malcoim and M.Rowe(eds.) *The Future of Football: Challenges for the Twenty-First Century*, London: Frank Cass.
- Canter, D., Comber, M. and Uzzell, D.L. (1989) *Football in Its Place: An Environmental Psychology of Football Grounds*, London: Routledge.
- Das neue SC-Stadion. (2015a)
<http://stadion-in-freiburg.de/#top>
- (2015b)
<http://stadion-in-freiburg.de/#tab-id-18>
- (2015c)
<http://stadion-in-freiburg.de/#tab-id-24>
(2018年3月9日閲覧)
- Edensor, T. and S. Millington (2010) ‘Going to the Match’, in S. Frank and S. Steets (eds.) *Stadium World: Football, space, and the built environment*, Routledge.
- Fishwick, N. (1989) *English football and Society 1910-1950*, Manchester: Manchester University Press.
- Footballtripper (2016) “Dreisamstadion”
<https://footballtripper.com/schwarzwald-dreisam-stadion-sc-freiburg/>
(2018年3月8日閲覧)
- 淵上正幸(2015) ”The New Bordeaux Stadium”
http://kenchiku.co.jp/online/world/world_no118.html
(2018年3月9日閲覧)
- ハーグリブス, J. (1993) 『スポーツ・権力・文化～英国民衆スポーツの歴史社会学～』佐伯聡夫・阿部生雄訳、不昧堂出版。
- 橋本純一(2010) 「スポーツ観戦空間～そのパースペクティブ及び現在と未来～」『スポーツ観戦学』橋本純一編著、世界思想社。
- 橋本純一(2014) 「ポピュラー・スポーツとスポーツ観戦環境～近年のスタジアム/アリーナの建設政策を中心に～」、環境科学年報第36号、信州大学。
- 橋本純一(2017) 「スポーツ観戦環境の設計(Ⅰ)～モダンスタジアム・デザインの変遷と具体例～」、環境科学年報第39号、信州大学。
- Hupka, S. (2014) “Suche nach neuem

Fußballstadion entzweit Freiburg” Sa, 25. Januar 2014, Badische Zeitung.

<http://www.badische-zeitung.de/suedwest-1/suche-nach-neuem-fussballstadion-entzweit-freiburg-80018872.html>

(2018年3月9日閲覧)

Inglis, S. (2001) Sightlines: A Stadium Odyssey, London: Yellow Jersey Press, 18-85.

Kelsall, G. (2000) ‘From the Victoria Grounds to Britannia Stadium: Remembering and reinventing the experience and identity of place’, in T. Edensor(ed.) Reclaiming Stoke-on-Trent: Leisure, space and identity in the potteries, Stoke-on-Trent: Staffordshire University press.

Mackay, D. (1995) A Sense of Place: The Meaning of Easter Road, unpublished MA thesis, Edinburgh: University of Edinburgh.

村上敦 (2007) 『フライブルクのまちづくり—ソーシャル・エコロジー住宅地ヴォーバン—』学芸出版社.

ノバック・M. (1979) 『スポーツ その歓喜』浅田隆夫校閲/片岡暁夫訳, 不昧堂出版.

Raitz, K.B.(ed.) (1995) The Theatre of Sport, Boltimore: Johns Hopkins University Press.

Röderer, J. (2015) “Freiburg sagt Ja zum neuen Fußballstadion” Mo, 02. Februar 2015, Badische Zeitung.

<http://www.badische-zeitung.de/freiburg/freiburg-sagt-ja-zum-neuen-fussballstadion--99830181.html>

(2018年3月9日閲覧)

Thrift, N. (2008) Non-representational Theory: Space, politics, affect, London: Routledge.

トゥアン・Y. (1992) 『トポフィリア：人間と環境』せりか書房.

(原稿受付 2018. 3. 16)